

天国の父ちゃんこんにちは

日比野 都

立風書房

天国の父ちゃんこんにちは

日比野 都

立風書房

天国の父ちゃんこんにちは

¥ 420 円 70

1969 年 3 月 10 日 初版発行 検印廃止

著 者 日 比 野 都

発 行 者 能 見 正 比 古

印 刷 凸版印刷株式会社

発 行 所 立 風 書 房

東京都品川区旗の台6-29-10

電話 東京 (786) 6561<代表>

振替 東京 74493 円141

落丁本乱丁本はお取り替えます。

© M. HIBINO 1969

目次

序章 父ちゃんの遺書 遺書への返事

7

はじめに……8 父ちゃんの遺書……14 遺書への返事……16

第一章 お葬式騒動てんまつ記

27

天国の父ちゃん、こんにちは……28 お葬式騒動てんまつ記……29 お葬式のアンコール……36

第二章 悲しみの中から（一、二月）

43

香奠返しのDM合戦……44 課長夫人からパンツ屋へ……46 慰められたり慰めたり……47 二七日のイブ……49 お得意さまはありがたい……50 ナイショの保険でがっくり……52 シンミリしたお父さま……54 うれしいお客高田先生……56 家がみつかった……58 郵便局でオクサマ気分……59 エリート夫人に憤然……62 『ひとときへ』の投書……64 他人の夫より我が家の犬……66 みあと慕いてワンは逝くなり……67 パンツ屋でいこう……68

投書のエコー……68 雪の日のムスメとムスコ……70 波紋の変わり種……72
うれしいお便り……73 かばい合おうぜ……75 朝ねばう母子……77 お得意
さまはコンサルタント……78 お得意さまで息ぬきを……81 目のあけられ
ないご注文……85 斎藤先生によろしくね……86

第三章 生きるための闘い（三、四月）

89

あなたの四十九日……90 すべりこみで千円……91 税金のセンリョウ……93
律子と映画に……94 福祉資金獲得へ……94 信ちゃんの合格祈ってネ……98
上流夫人と講演会へ……99 無信仰の幸福……102 香奠でごちそうさま……103
よくぞパンツ屋に……104 カメラと位牌……106 律子、修学旅行……107 わが
オシャレ……108 春と手紙がやってくる……109 紅白水引きのおくやみ……111
香奠の時差出勤……113 夜間営業……114 インスタント娘……115 まずは充実
……116 一本の手紙から……117 見せられたるバンティ……118 充実した休日
……120 千円札の往復……124

第四章 現実はきびしい（五、六月）

127

ああ、売春大学生……128 わが家の児童憲章……130 就職説明会……131 律子
の遠足……133 コトリとコトバが来た日……134 母の日ははなやかなり……136
ファイト満々……141 現実はきびしかった……144 紅鸞先生にお目にかかる

…149 PTAへ…150 律子の誕生日…152 朗報あり…154 ババによく似
た鼻の穴…155 京大教授とパンツ屋…156 律子の心臓…158 文芸講演会
に出かける…160 エデンの東から…163 もって瞑すべし…165 先生のオ
ショウユ…166 ミロのヴィナス…168

第五章 パンツ屋の城、いざ建設（七、八月）

171

男はみんな穴がお好き？…172 アフター・タタリ…173 かくてお見合記
念日も…176 商売はアタマ…178 律子の就職試験…179 父ちゃんのお墓
…181 大工さんの人情…184 健とキンサボ…186 生活と文学の会…188
健、海へ行く…189 健、海から帰る…190 さよならの名人、あなた…191
パンツ屋社長邸の見積り…196 ああ登記というもの…197 大工が入った
日…199 玄関のない家…200 娘の留守番…202 淋しい健…202 先生から
の贈り物…203 ミセス六無斎…208 トタン屋根と瓦棒…212 寝る子は育
つ…213 バレーで同志…215 終戦記念日に思う…216 大文字焼き…217
律子の演説…218 何たる侮辱…219 健の詩作…220 娘の慰労…223 亀ち
ゃんの申し出…224 あすは引越し…225 きょうは引越し…227

第六章 秋晴れの日々（九、十月）

231

ご用聞きの信用…232 他人のお葬式…232 観賞用男性…236 健の怒り…

238	わたしの誕生日……	239	一長一短……	241	健の『オリンピック論』……	242
	すし屋の経営学……	243	オリンピック開会式……	246	一日クリスチャン……	247
	あすは運動会……	250	運動会……	251	銀行開店……	258
			律子はあかん……	262		

第七章

しあわせの歳末（十一、十二月）

265

	市役所詣で……	266	アンマ哲学……	267	妻の座から社長に……	268	ついていた
	日……	271	純情保険屋……	274	トラガリ、健……	276	日本男児、健……
							278
	もにはかなわない……	283	ネコのパンツ……	285	柿の実と別れ……	290	娘とギ
	ター……	291	とかく未亡人は……	296	うるさいうちが花……	297	争いの怒りと
	悲しさ……	299	三つの格言……	301	親切大工さん再来……	302	息子の成長……
							305
	やりきれない友情……	306	障子張りのムード……	307	ご無沙汰しました……	309	
	弱き者よ、汝、母オヤ……	311	クリスマス・イブ……	312	律子、名古屋へ行		
	く……	316	子どもはいいなあ……	317	ひとり若き日を……	318	寝歳末……
							320
	あわせ……	321					し

第八章

父ちゃんの一週忌

323

	こいつ、春から……	324	いいお正月……	325	健の誕生日……	326	本を出版し
	たい……	326	もう一周忌ですね……	330			

あとがきにかえて

337

天国の父ちゃんこんにちは

装幀・挿絵……長尾みのる

序 章

父ちゃん
の遺書
遺書への返事

はじめに

およそ金の苦勞を知らずに大きくなり、一生食うにこまらぬという仲人や周囲の口車にのり、親のいうまま「幸福」という約束手形を受けとった形で結婚、夫に頼りきって、ノホホンと妻の座にあぐらをかいていたものですから、その約束手形が不渡りになろうとは神ならぬ身の知るよしもなく、まさに青天のへきれきでした。

夫が昭和三十三年、勤務先の民成紡績株式会社の大阪出張所から本社名古屋工場へ転勤と決定したとき健康診断をうけたところ、結核、即刻入院という宣告を受けて、三月に国立療養所、刀根山病院に入院いたしました。

ややよくなったとのことでしたが、糖尿病と腎臓病のおまけがついていたため、手術その他の治療も困難で、たまたま、病棟を改築するとあって、それを機会に三十四年十月に退院、自宅療養にふみきました。

月給も減額され、健保も切れ、収入がまったく途絶えて、退職金ほしきに会社を辞めました。

それも乏しくなって、いよいよ食えなくなりかけたとき、近所に住むオコセメリヤスの取次店をしているという人から、品物を貸すから商売をしてみないか、と持ちかけられました。できるかどうか

考えているヒマありませんでしたし、ともかくやらねばならぬと決意し、幸いに自転車にのることができましたので（子どものころ、女の子のくせに自転車にのるとは、と父に大目玉を食いながら、こっそりけいこしたのです。親のいうことをきかぬのも、時として大変いい結果を生む場合もあります）、さっそく、段ボールのみなんの空き箱に、借りてきたメリヤス肌着を詰めこんで、友達の家から、おそろおそろ始めました。時に昭和三十六年の十一月のことでした。

商売の経験はもちろん、勤めたこともありませんでしたので、最初のころは、まったく薄氷を踏む思いでしたが、次々と紹介されて、お得意がふえ、頼まれて、ブラウス、セーター等も自分で本町の問屋へ仕入れに行くようになりました。三十七年の六月からは、得意先の、阪急百貨店に店を出しているという人からイージー・オーダーの人形見本や注文外れの品を売ってくれないかと頼まれ、それも併行してやらせてもらいましたが、月賦販売のためもあった、喜ばれました。六月三日にサンケイ新聞の『わが愛の記』に載った私の投書も、宣伝の役目を果たしてくれ、商売は軌道にのりました。

三十八年の秋ごろから夫は足が腫れ、十一月には死を宣告されました。それから悲惨な日々の連続でした。商売から帰って声がないと、もしや、と心臓が高なったことが再々ありました。

どうにもならない現実ならば、回避することなくぶつかるよりほかありません。

逆境に身をおいたがために、かえって得たものもたくさんあります。多くのよき師よき友にめぐりあうことができました。人生において、めぐりあいこそは、何よりもたいせつなものと学びました。めぐりあいができたのも、パンツ屋を開業したからにほかなりません。

夫は、三十九年の一月十三日に亡くなりましたが、これは、夫の死がもたらした、思いがけない幸福といつてよいでしょう。

さて、どうして「パンツ屋」という、おかしな、そして、エッチな名をつけたかと申しますと、「パンツ」というと、だれもが笑います。商は笑に通ずる……と申します。笑いは生活の潤滑油ですが、商売においては、特に必須条件——欠くべからざる要素です。それと、扱う商品の代表選手がパンツだからです。

後日、片山竜二氏著の『アイディア紳士』という本を読みました。その中にネーミングがいかにたいせつかという項目があり、それによると「パンツ屋」の名は、まさに最適という答えが出て悦に入りました。もっとも、上品な奥様がたは、パンツ屋さんとは、なかなか呼んではくありません。ご自分の品が下がると思われるらしいのです。抵抗があればあるほど、私は、なお、この名に愛着を覚えます。だいたい私の場合、行動が先に立って、理論がずっと遅れてついて行くというぐあいです。このごろは商売もイタにつき、パンツを売るよりも、むしろ油を売るほうが多く、油屋と改名したほうがピッタリしそうな様相を呈し、楽しく商売にいそしんでいるしだいです。でも、その油の売りっぷりを買われて、ときどき体験談をたのまれて好評なのは、ケガの功名ともいふべき愉快な現象です。

やっと親子三人が食べていけるだけにすぎませんが、なんとか食べてさえゆければけっこうだと思つています。

ムスメの律子^{りつこ}は高校を卒業し、ダイハツ工業に勤めて二年目、仕事熱心なOLです。早くおヨメに行きたいのだそうです。

「結婚して主人に死なれたら、ミイもパンツ屋をやるからいい」

と申しますゆえ、本人の希望どおりにするほかありません。

ムスコの健は、この春、志望の豊中高校にはいりました。奨学資金とアルバイトで、学資の負担はかけませんので助かりますが、夫の再来かと錯覚させられるくらい昂然^{うきげん}としています。この本の出版についても、

「ぼくは、パンツ屋の息子^{むすこ}でたくさんだ。何のために本なんか出すんだ！」

と、きびしい批判を浴びせています。

しかし、夫の死以来、亡夫にあてた手紙の形式で書きつづけて来た生活記録が、いつの間にかノートに十数冊もたまってしまいました。いま、それを一冊の本にまとめることは私の人生にとっても、ひとつの大きなしめくりになるような気がするのです。

そして、これを、天国の父ちゃん——亡夫国彦にも送り届けることにしましょう。

どうしたら、届けることができるかしら、さあ、それは、夫のほうで考えてくれるでしょう。彼は、今、天国で、ゆっくりと考える時間はいくらでもあるでしょうから——。

昭和四十一年四月

日比野 都

追記

この本が出版されて三年近くたちましたが、その間に、はじめの出版社が解散する……といった不測の事故もあり、その後、私を知ってくださったかたから、「本がほしい」といわれても、どうすることもできませんでした。

こんど、立風書房のほうで、再刊していただくことになり、何か借金でも返したような、うれしい気持ちです。

再刊と言っても、構成も変え、前の本には印刷されなかった部分もとり入れて、分量的にも、前本の本からくらべて、倍近くにふくれあがりました。まったく新しく作り直したとっていいと思います。

いろいろな人のお世話になりました。そもそも『天国の父ちゃんにちは』を本にするきっかけを作って下さった、お得意さまの山崎正美先生夫妻、はげまし、指導して下さった大阪教育大の村田勉雄先生、「生活と文学の会」の伊藤昇平、清原久先生、私の心の師ともいべき融紅鸞先生とあるこうらん、それに「ひととき会」の会員のみなさま、また、何度も池田まで足を運ばれた立風書房の能見正比古氏、富田和男氏、さらに、TBSのふう先生こと、石井ふく子プロデューサー、ほんとうにありがとうございました。

私のような「パンツ屋のおばはん」が、こんなにたくさんの人々の暖かいおひきたてをいただくな

んて、身にあまることです。

一人でも多くのかたがたと、この幸せを語り合いたい気持ちでいっぱいです。

昭和四十四年二月

日比野
都

父ちゃんの遺書

都殿

これから俺の書くのは遺書ではない。ひごろから思っていることを、書き記したまでに過ぎない。もちろん妻たる君がいちばんよく知っているように、筆不精（拙文章）と字べたくそである。こんなことを書くこうと思いついたのは、俺の気の弱いせいであろうが、今度の病気で、刀根山病院に入院して毎日病人ばかりといっしょにいて、たまには神の御召しがあって、裏門から去って行く人を目のあたりにしておれば、自然ときびしい気持になって、ひよっとすると俺にも順番が回ってくるのじゃないかと取り越し苦労をするのも致し方ないことではなからうか。

もちろん、こんな気持になるのは身体に悪いから、なるべく思わないようにして、一生懸命、全快して、再び妻子と楽しく暮らすように努力はするが、前にもいったように、ひよっとということを前提として書くのである。ひよっと、ということはなにも病人に限ったことではない。今日も新聞やラジオで、全日空機が下田沖で消息を断ったことを報じている。

人間の命は、一寸先も保障の限りではない。